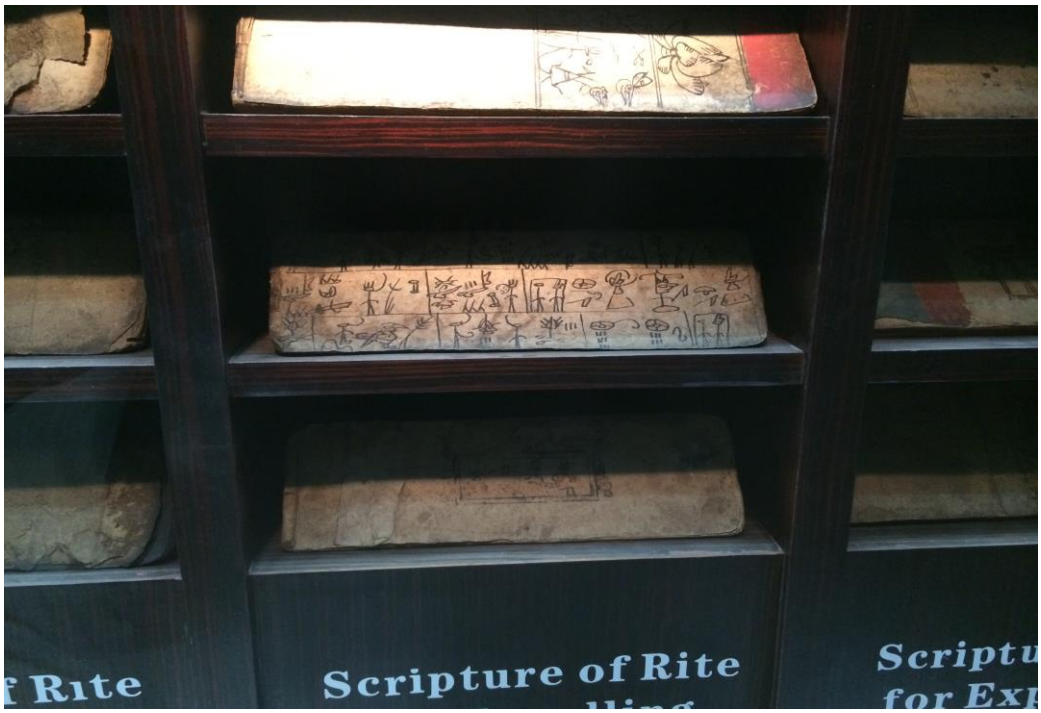
続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第6回

2019/03/15　版

団士郎



雲南省麗江にあるトンパ文化研究所の展示

十年前と

約十年前に連載していた文書を、読み返しながら加筆、修正しつつ掲載しているのだが、「家族」の基本的なところに変化があるとは思えない。一方、社会や、世間に漂う相互了解には、少なからぬ変化を感じている。

家族の面白いところは、社会と呼応しながら、矛盾をいっぱい抱えつつ、結局、存在は大して変化などしないがごとく見せ続けてきた所だ。

それが近年、家族を持とうとしない人々や、生涯単身で暮らす選択をする人が増えてきた。交代する次世代の存在を、気にしていないかのような人々が希ではないということなのか。

自分世代で家族に区切りがついてしまう事や、自分一人で高齢化社会の一員であり続けることについて、どう考えているのだろう。そんな選択も増えた世界で「家族」はどうあり続けるのか。今後、新たな何かが蠢き始めるのか、興味深く眺めている。

六　夫婦サブシステム

知恵

家族に起きた問題が峠を越した頃、初めて気づかされたお互いの事。こういう体験は多くのカップルの記憶にあるだろう。

もめ事の渦中にある時、たいていの人はそのことしか見えなくなっている。これは仕方がないことだ。だから同様に、幸せ気分の時もやはり、それしか見えていない。

夫婦に代表される親密性を持った人間関係をこういうものだと考えるなら、夫婦喧嘩の類は、多様さを持った相互理解の一回路だと言うことが出来るかもしれない。

だったら夫婦になった時に、カップルのこういうメカニズムを学習しておくのは、意味のあることだろう。婚前カップルのカウンセリングが実施されていたりするのは、こういう知恵だろう。

ウキウキ気分だけの二人に学べるのはせいぜい、万一上手くいかなくなったら離婚すればいい、この程度の認識でしかない。

A・ビアスの「悪魔の辞典」の“フレンドシップ”の項には、「凪の時には二人乗れるが、嵐になると一人しか乗れない船」、と書いてあるそうだ。孫引きからの知識だが、なかなかの皮肉だ。

ならば、結婚したカップルのパートナーシップには、凪の日などないと思って航海に出るのが肝要だろう。そしてそれでも沈没してしまわないのが夫婦の知恵というものである。

さらに、親になった人は乗組員まで増えていくのだから、大変は当然である。何も起きないことをイメージしすぎるから、現実が負担の大きいイレギュラー事態のように感じられてしまうのだ。

本当は

息子の起こした問題で相談に来ていた夫婦が、突然別居してしまった。聞いてみると、かねてからの夫の問題解決への姿勢が、いよいよ受け入れられなくなってしまったという。

普通、問題が起きても、いきなりこんな結論を出してしまう人は少ない。やはり、ひとつひとつの原因究明や、それなりの回復努力がおこなわれる。そしてその中で、夫婦関係や家族力動の正体が見えてきたりするものだ。

ところが彼女は、長年の積み重ねに今回のことが重なって、失望してしまったらしい。

来談の訴えは中学生の兄が、小学生の妹に性的いたずらをしているという、少々やっかいな話だった。

だから、兄妹を伴って母が実家に戻ってしまったと聞かされたのには驚いた。来談要件と選択された行動につじつまが合っていないと思ったからだ。

しかし時間経過と共に、このカップルの問題の深さが明らかになってきた。

事情があって途中から夫方祖母との同居に踏み切った一家だったが、そこでの嫁姑の確執がベースの問題だった。そこでは、一つ一つの問題より、解決に向かう夫の姿勢が妻には我慢ならなかったのだ。兄の問題行動は、潜在化していた課題を、表面化させる役割を果たしてしまったと言ってよかった。

その後、兄妹間での問題行動再発はなかったようだから、母親のこの対応も不適切だったとはいえない。そして、夫婦の別居生活はずっと続くことになった。

夫婦の問題が子どもの症状という形で、表

面化する場合が少なくない。それは家族を守りたいと思う子どもの無意識な選択であることも多かった。

ただ、ひとこと断っておくと、こういう解釈はけっして合理的ではない。そのことは解った上で、こういう事に気づいておくのは意味のあることだろう。

義理の関係

わかりやすい話だが嫁姑、この古くからのテーマは「夫婦サブシステム」明確化のための踏み絵である。ニュアンスは様々だが要するに、「私かお義母さんか、どっちを取るの？」と妻から突きつけられている。

その問いに、「どっちかなんて選べない。両方大事だ・・・」と応えるのは愚の骨頂である。こういう人は、「私と仕事のどっちが大事なの？」と問われても、「子ども達と会社のどっちが大切なの？」と聞かれても、同じ事を答える人なのだろう。

家族関係の中には、冷静で公平であるだけではなく、偏って絶対の味方を宣言しなければならないことがある。ここで問われているのは客観的事実や結果ではなく、想いや決意なのである。そのことを多くの嫁姑関係に関わるケースを見て学んだ。

それにこのような義理の関係の問題は、私たち（団塊世代）より上世代のテーマかもしれないと思った時期もあった。

若い世代は、自由に自分たちの選択を実行しているのではないかと思ったりもしていた。しかし実際はそんなことはなかった。むしろ、必要以上に囚われている人も少なくない現実を見た。

近年の関心（欲望）の中心は「争いにならない事」である。争っても得にならないことは止めておく。真理の一面ではあるが、これが蔓延しすぎると、目標の中心は「争わない」になる。この手っ取り早い対策は我慢である。

適切な主張をしない人が、なんとか上手くやろうとすると手立ては我慢しかない。そしてその破綻結果を、あちこちの場でストレスと称して語り、病む。

近年増えていると聞くマスオさんファミリーという居住形態。婿養子もあれば、そうではないケースもあるが、妻の実家で妻の実親との同居。これなら妻のストレスは少ないし、夫が上手に息抜きすれば・・・等と考えるのも、少々安易すぎることを知らされるケースに会った。

以下のマンガ、「夫婦のギャップ」である。

新婚半年という
男性と仕事を
していた時のことだ。

彼の担当ケースの
スーパーヴァイズを
することになっていた。

助言されたように
振る舞えない事を
悩んでいた。

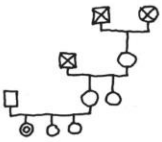
彼自身の課題も感じたので、
いろいろ個人的なことも
質問することになった。

三人兄弟の
次男である彼が、
関西で仕事を
することになったのは、
大学が京都だったからだ。

卒業後、カウンセラーとして
働きたいという希望を持っていたが、
なかなか実現の難しい道だった。

一年半のアルバイト生活後、
やっと希望の職につけた。
しかし週三日の
非常勤だった。

そんな中、私生活では、
偶然の出会いが
とんとん拍子に進んで、
結婚話が
もちあがっていた。



彼女は
地元旧家の長女で、
婿養子を
絶対の条件と考えていた。

彼が男三人の次男坊であると
知ってからは、
彼女の両親の方が
熱心なくらいだったそうだ。

彼にすれば、
仕事もまだ始めたばかりだし、
収入も不安定な状態で…と
ためらいがあった。

しかし
強く求められて結婚。
マス男さん状態の
同居の新婚生活になった。

妹たち二人も、
これで自分たちは
出て行けると
喜んでいた。

妻一家から
大歓迎され、
何も問題は
ないはずだった。

ところが彼は、
思いもかけない
問題に直面する。
食事のことである。

共働きで自分たちを育ててくれた母の夕飯は、とにかく食べ盛りの男の子三人が、おなかいっぱいになるメニューだった。

一方、三人姉妹を育てた旧家の食卓は、繊細さに溢れていた。

妻の祖母も一緒にとる上品な食事は、彼にはカルチャーショックだった。

何よりも腹がふくらまないのである。

夕食後も引き続き空腹。そんな日々が続いた。彼はこのことを妻に言えなかった。

そんなことは想像したことがない妻にも分からなかった。

家計への貢献度の低さが、それを口にすることをためらわせた。

仕方なく、駅前のコンビニで少し腹に入れてから帰宅したりした。

「けっして老人食のようなことはないんです。お肉も出るんですけど少ないんです。高そうな肉でね」

「安くていいから、もっとたくさんなんて…」

「奥さんに率直に言えばいいのに…」とは言ったが、彼の微妙な心境は笑えなかった。

それが引き金になって、いくつものカルチャーギャップが噴出し始めた。

結局、これが理由で離婚になった。しかし食事の話は、最後まで明らかにはしなかったらしい。

それぞれの育った家族は国だと言っていいのかもしれない。

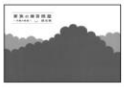
結婚したら新しいルールの国を作るのが一番わかりやすい。

相手のカルチャーに合わせようとしすぎて壊れてしまうのは馬鹿げている。

でも、こういう人が増えているのではないかと思う。

木陰の物語の単行本が発売中です

家族の練習問題 2
〜木陰の物語〜
著者：団 士郎
1365円（税込）
ISBN978-4-9901713-2-2



家族の練習問題 1
〜木陰の物語〜
著者：団 士郎
1300円（税込）
ISBN978-4-9901713-0-8

お近くの書店かオンラインブックショップ（クロネコブックサービス・アマゾン）でお買い求めいただけます。取扱書店はホンブロックのwebサイト（http://www.honblock.net）でご確認ください。

夫婦サブシステムの確立にとって重要なのは、時と場合によらない配偶者サイドでの努力だ。

そして同時に、きちんと対立や葛藤を抱えることもできる二人であるべきなのだ。安易に子どもや親族など、身近なところに援軍を求めない。だからこそ対等な連携ができる。これは当然至極のことなのだが、なかなか難しい。

ぶつかるエネルギーを惜しみ、表面的調和と、裏側での不満をセットで、「親族関係のストレス」などと位置づけている限り、新たな局面が拓かれることはない。

忠誠心

子どもは自分が育った家族のルールを、世界として受け止めで生きる。やがて外の世界と出会い、我が家スタンダードと世間のそれとの差異にも気付く。そこを上手く両立させながら、やがて迎える独立、新生活の準備をする。

しかし時々、新しく営み始めた家族の中に、昔の忠誠心の名残を残したままの人がある。

それでも新しい生活が上手くいっていれば問題はない。新生活に支障を来すようになったら要注意である。

夫婦サブシステムの視点で言えば、彼の両親は強力なそれを築いて、やがて金婚式を迎えようとするカップルだ。しかし娘には、自分たちの一番大切にしてきた関係を築かせてやることは出来なかった。むろん、この結果は親が押しつけたモノなどではないだろう。長女の人生の決断だと語るのが、妥当性は高いだろう。

そして息子にも、彼の夫婦サブシステムの中に、あらかじめ実家だけで継続する慣行は認めさせる立場をとり続けている。

これは世代間境界と夫婦サブシステムのことを考えたとき、実家から新しい家族への侵入的行為である。

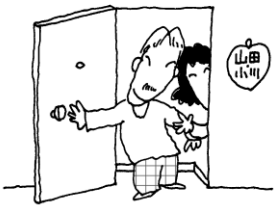
しかし彼の妻はこれを、個別の困った事情として受け流しているという。話を聞くと、夫も又、妻の実家の両親や義兄弟達と酒を飲むときの方がリラックスしているという。

高齢化しつつある両親のことである。温泉行きはそのうち、物理的に不可能になるに違いない。

「それまでは、まだしばらくこのままで、女房と子ども達には負担をかけますが・・・」と彼は笑う。

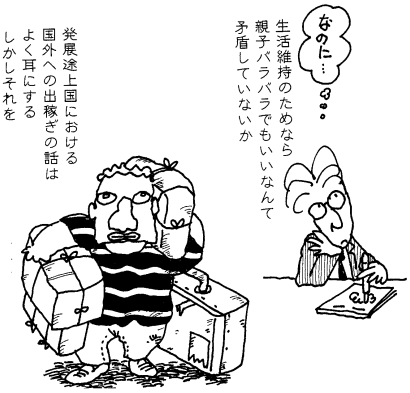
変則的でも、当事者が納得をして、上手くやれているならいっこうに構わないという一例である。

「同棲」に対する世間の視線は、
時代と共にあまり批判的ではなく
なった



考えてみると、
同棲に別居はない

内縁関係や
事実婚にも
長期別居は
ないだろう



発展途上国における
国外への出稼ぎの話は
よく耳にする
しかしそれを
良いことだと
語っているわけではない

東北からの
冬の出稼ぎも、
地元の人しか
知らない現実を
作っている

出たまま行方不明に
なってしまった家族を
抱えた人が地域に
結構いるのだという

昔、「かくも長き不在」という映画があった。
回復しがたい戦争の爪痕が平凡な市民夫婦の人生に影を落としていた
1960年代の映画なんて知らん
不在は関係を否応なく変えてしまう。どう変化するのかは誰にも分からない
変わってしまってからはじめて、こんなはずではなかった…と思い至るのである
私、なにか悪いことした?
家族が行方不明?
えっ
よくあることなの…
向こうに女の人ができて…
しかし単身赴任がきっかけで、家族が崩壊してしまった例はいくらもある
無論、単身赴任にしても出稼ぎにしても、上手くやっている人も多い。その後に起きる事態は個別的事情だという人があるかもしれない
人によるでしょ
だがそんな人は、中高年のリストラ自殺もホームレス化も、個別的事情だといって済ませるのだろう
人間性の問題ですよ
一家の選択は自分たちで決めて良い、これは間違っていない。だから家族が単身赴任を決断することは自由だ
選んだことの結果、選ばなかったことの結果が未来を作ってゆく
家族生活のレパートリーに、単身赴任がこんなに食い込んでいるのは、日本だけに偏った習慣だと聞く
家族にとって、亭主元気で留守はよいのだろうか?
ダンスにゴン♪
たしかに該当する人みんなに起きる問題ではない。しかし何でも個人的事情で片づけられるほど人間は強くないと思う
家族が一緒なら起きなかったかもしれないことが、単身赴任や出稼ぎ中に起こってしまう
その時、その場に家族として居なかったことが決定的な亀裂を生んでしまう
「不在」は大きな問題である

ニコラス・スパークス

映画「きみに読む物語」を面白く見た。アルツハイマーの妻に、自分たちのこれまでの何十年の愛の物語を毎日語り続ける年老いた夫の話だ。ちょっと通俗的で、そしてやっぱり感動的だった。

ありきたりとはなかなか奥深いことである。近年とくにそう感じる。何であろうと、限られた人にだけ解ることで、いい気持ちになりたがるエリート意識が好きではない。

それよりずっと通俗的で、ありふれているが、「でもやっぱり泣くよね・・・」なんて感想が、誰かから漏れてくるのが良いと思う。そして同時に、もしそこに大衆的愚かしさが混入しているなら、その修正努力はしておきたいと思う。

たまたま駅の書店で目にして、気まぐれに手にした「きみを想う夜空に」。出張経路を移動しながら、四百ページほどの単行本を、二日で読み終えてしまった。アメリカで大ベストセラーになったと書いてある純愛物語である。その筆者紹介で、「君に読む物語」の著者であることを知った。「君に読む・・」も「・・夜空に」も夫婦愛の物語だ。あきれるほど唯一無二の愛の物語。

一人あたりの平均結婚回数は世界トップレベルではないかと思うアメリカ（調べたわけではないので、揶揄的冗談だと思ってください）で、これが読まれる背景を思う。

ないものねだり、あるいは、古き良き時代へのノスタルジーだろうか。はたまた、団塊世代の団塊ジュニア以下の行動への批判であろうか。この連想から、不況になると離婚が減るというアメリカの、身も蓋もない事実も思い出した。

もっとも日本の現状も今、類似の特徴にあると言えるかもしれない。青年期女子にとって結婚は、一つの失業対策である。「就職もいいとこないし、やりたい事もないし、結婚でもしようかなぁ・・・」は、十分選択肢として成立している。

だからフリーターやネットカフェ難民などとして登場するのは圧倒的に男子なのだ。「いい仕事もないし、内定も取り消されたから、結婚でもしようかなぁ」と言えるのなら、助かる男子はいるに違いない。

＊

こう書いたのが約十年前のこと。そして今、日本社会は男子、女子の差別問題から、富裕層と貧困層というテーマに移ってきている。みんなで豊かになろうと励んだ高度経済成長の時期を経て、たどり着いたのがここである。

現実が見せる偏りは、ますます個々人の姿にいびつな影を落としている。貧富があらゆる社会的テーマに介在してきて、正論がはけない。

身もふたもない本音と称されただらしなさだけが、SNSを中心にまき散らされる。こんなはずではなかったと思っている人も多いだろう。

それでも大昔より豊かになったのは事実だ。今、思うのは慣れ親しんできた貧困対策だけではなく、ひずみのある豊かさへの適応行動の教育も行なわれなければならなかったという事だ。

経済だけが我々を充たしてくれると信じる世界の住人になってしまったのは、富裕層だけではなく、貧困層の人々もより一層だと言っても良いのかもしれない。

＊

この小説の二人、当人達にはこの人しか居ないと思わせる出会いであった。しかしそんな出会いが実ることはなく、時間はそれぞれを、新たな運命に巻き込んでゆく。

後から考えたら、あの時が分かれ目だったなと思うことが人にはある。何度でもやり直しがきく事もあるが、たった一度しかチャンスは

なかったのだなと気づかされる事もある。

何度もチャンスを逸しておいて、こんな事になるとは思わなかったと後悔して、一騒ぎ起こすような人もいる。

2008年、NHK紅白歌合戦に五十三歳で初出場の女性歌手が話題になった。理由はその歌である。「夫婦愛」をテーマにしたものだといい、中高年女性の圧倒的な支持だという。

不況になると離婚が減る話は先に述べた。日本では今、不況のさなか、団塊世代がリタイアを迎えて、どんどん在宅高齢者カップルが増えている。

この人達のメンタルヘルスを家族単位でしっかり確保させておかないと、社会が莫大な医療費や介護費用を背負うことになるのは、素人目にも明らかだ。

そんなわけで中高年は、「メタボリック」に続いて「夫婦愛」がブームの兆しらしいが、これは社会行動学的に見ても理にかなった話だと思う。

「熟年離婚」はあっという間に消えて、次は「夫婦愛」。いずれにせよ、軽はずみな話にカップルが次々と巻き込まれているあたりが、いかにもだと思う。

少しの賢明さがあったら、うかうかと時流に乗らないことが肝要なのは分かると思う。

相談実感

最近の相談の実感だが、感情的軋轢ゆえの厳しい決断を突きつける妻が増えている気がする。事態はそれぞれに個別の事情があるのだが、出した結論が厳しい。長年の夫婦関係の結末が、そんなことになるだろうかと思わせるものだ。

あるケースでは妻が夫に、家を出て、一人暮らしの母親の世話をすることを求めていた。義母には少しぼけ症状が始まっていた。そしてその居住形態を聞いて驚いた。母屋と離れ家の地続き隣家なのである。

夫は夕飯も入浴も家族と一緒である。しかし就寝するときは、隣の祖母宅に行く。完全に夫婦である時間だけの拒否である。そして、祖母の介護にも一切手は出さない。

聞いているだけで、妻のかたくなさや拒絶がビンビン伝わってくる。どちらの分担かとか、誰の責任かを問うのではなく共に背負う。いろいろあって、争いにもなって、それでも雨降って地固まる結果を手にする。

これを可能にするために必要なのが夫婦サブシステムである。